

事前に行う課題の難易度が展望的記憶に及ぼす影響について

米澤 菜月

私たちは円滑な日常生活を送る上で様々な約束や予定を遂行している。未来で行おうとしていることを覚えておくことを展望的記憶 (Prospective Memory, 以下 PM; Einstein & McDaniel, 1990) と呼ぶ。これまで「作業記憶」、「潜在記憶」、「記憶の歪み」、「自伝的記憶」や「行為や動作の記憶」などのテーマと共に研究の対象とされてきた (小松・太田, 1999; 川原・松岡, 2009) PM の失敗は些細なミスから人命を奪う重大な事故まで引き起こす。

PM 課題はその手がかりによって時間ベースの PM 課題 (例: 課題 30 分後に洗濯物を取り込む) とイベントベースの PM 課題 (例: 田中さんに会ったら相談すべき話題がある) の 2 種類に分類される。前者がアラームなどの外的 手がかりに頼りやすい一方で後者は手がかりが出現するタイミングが予想しづらく、外的手がかりに頼ることが難しい。そこで本論文ではイベントベースの PM 課題に着目した。イベントベースの PM 課題の成功の難しさは、PM 課題がその性質上意図を計画してから実施までが遅れてやってくるため、PM の手がかりが出現するまでの間に他の課題を完了させなければならないことに起因する (Mahy et al., 2018)。しかしこの遅延時間 (delay interval) はただ PM 意図を保持しつづけるだけの時間ではないと考えられており、特に遅延時間中に行う課題の難易度が後の PM 課題に及ぼす影響について相反する結果が報告されている。そこで本論文では 2 つの実験を通して遅延課題の難易度が展望的記憶能力に及ぼす影響について改めて検討することを目的とした。Mahy et al. (2018) の難易度の高い遅延課題を遂行する群においてマインドワンダリングが発生し PM 課題の成績が向上するという主張に基づき、次の仮説を検討した。

仮説: 遅延課題の難易度が高いほうが PM 課題の成績が向上する。

本論文の実験では PC を用いた課題と質問紙調査を行った。遅延課題は n-back 課題 (実験 I と実験 II 共通)、PM 課題には語彙判断課題 (実験 I)、簡易版 Virtual Week 課題 (実験 II)、物品の返却課題 (実験 II) を実施した。実験 I では 37 名、実験 II では 42 名の参加者を遅延課題の難易度で 2 群に割り当て、PM 課題の正答率を群間比較した結果、実験 I、実験 II ともに有意差は見られなかった。また、質問紙調査の結果、実験 I では遅延課題中に PM 課題のことを想起した回数 (PM 想起) にも群間差が見られなかったが、実験 II の簡易版 Virtual Week 課題についての PM 想起は、低難易度条件の参加者が有意に多かった。本論文では遅延課題の難易度が後の展望記憶に有意な影響を及ぼすという結果は示されなかったが、難易度の低い遅延課題が PM 成績に良い影響を与えるとされる (Mahy et al., 2018) PM の想起を促進する事が示された。(安全行動学)